

開港1周年を迎えて



神戸市みなと総局参与(空港事業室長) **山野 啓**

神戸空港が開港して1年が経過した。開港日の2月16日は小雨まじりの天気であったが、午前7時21分、ほぼ満員の乗客を乗せた羽田行き初便が離陸した時は感慨もひとしおであった。その後、4月の不法侵入事件といった想定外の事件もあったが、総じて事故なく安全に運航が行われたことは、国・関係機関、航空各社をはじめ多くの方々の安全運航の確保に向けた日々のご努力の賜物であり、改めて感謝申し上げる次第である。

現在、日本航空、全日本空輸、スカイマークの航空3社により全国7都市に1日27往復便が運航されているが、羽田線、新千歳線、那覇線の幹線3路線に利用客が集中し、仙台線、新潟線、熊本線、鹿児島線の各地方路線の利用状況の厳しさが浮き彫りになった1年であった。航空会社からは路線再編が発表され、今春以降、幹線の比重が高まるとともに、リゾート地として人気が高い石垣路線が新たに開設されることになった。結果的に、新潟線、熊本線の2路線は運休の見通しであるが、これらの地域とは、これまでに培った交流の輪を大切に、将来の再開を期すこととしたい。

一方、昨年9月からは国土交通省、CIQ各機関のご協力を得て、国際ビジネスジェットの受け入れを開始した。国際ビジネスジェットの就航は、外資系企業の誘致はもとより、医療産業都市構想など神戸の将来を担う新たなビジネスの発展に寄与するものと考えている。

また、本年9月に本市と大阪市で開催される世界華商大会の際には、ビジネスジェットによる神戸来訪もPRしていきたい。

開港後、例えば、市内ホテルの宿泊稼働率が昨年度上半期(4~9月)の平均で対前年比約7%伸びており、また、大手旅行会社へのヒヤリングによれば神戸管内の販売が前年に較べて大きな伸びを示している。

さらに、空港に近いポートアイランド(第2期)において、空港に近いという立地上のメリットを生かして企業進出を決定する事例が増えているなど、観光・ビジネスの両面で開港効果は着実に表れつつある。

神戸空港は、今後とも増大が見込まれる関西圏の国内航空需要に的確に対応し、関西圏全体の発展に貢献できるものと確信している。関西圏の国内旅客数は、神戸空港開港前より増加しており、神戸空港の開港が関西圏全体の国内航空需要の増大につながっているものと考えている。

また、昨年7月13日より神戸空港と関西国際空港を結ぶ「神戸-関空ベイ・シャトル」が運航を開始しており、神戸空港を利用して関空に乗り継ぐ旅客や、神戸・播磨方面などからの関空利用者のアクセス利便性が向上し、関空の集客力の強化につながるものと期待している。

今後とも、関西3空港の役割分担のもと、関西圏全体の発展に貢献していきたい。